

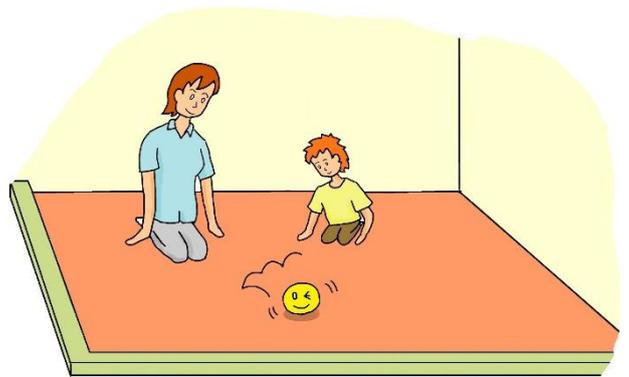


～音など視覚以外の感覚を手がかりに環境を把握する～

見えにくさのある子どもにとって、音は周囲の環境を知るための重要な情報になります。そのため、幼少期からさまざまな音に親しむだけでなく、音がどこから聞こえてくるか、どのくらいの距離から発せられているのかなどを特定できるように少しずつ練習をしていきます。子どもにとって魅力的な音や興味を引き付けられる音に加えて、関わる大人が肯定的に「**楽しいね!**」とか、「**〇〇ちゃんのお好きな音だね**」などと気持ちに乗せてあげます。そうして、**音の出る方向に手を伸ばしたり、音の方向に向かって進もう**としたりする気持ちを育みます。

こうした経験を積むことで、自分から音の出るおもちゃなどに手を伸ばすようになってきたら、より発展的な遊びに誘ってみます。

例えば、20秒くらい音を出しながら動くおもちゃを使って、部屋の一角をおもちゃが遠くまで越えていかないうちの高さで囲って、動いている間に捕まえるというゲームをします。盲の子どもの場合、音だけを頼りにおもちゃの位置を特定して捕まえるため、集中力がとても求められます。楽しければ楽しいほど子どもは集中力を発揮しますので、このゲームのような楽しくできることを探してみてください。ただし、動くおもちゃは、子どもによっては怖がる場合がありますので、その場合はボタンを押すと音が出るといったタイプのものを用意して、どのボタンを押すとどんな音が出るかといった遊びにするなどの配慮が必要です。



音を頼りにどこにどのようなものがあるかを把握できるようになることで、移動するとき空間の広がり具合や距離感が分かるようになります。例えば「テーブルはここだよ。」とか、「イスはここにあるからね。」と言いながらそれぞれトントンと軽く叩くと、具体的に“ここ”はどの辺りか空間の位置関係を捉えられるようになります。

晴眼者（目が見える人）は、空間的な環境を把握するときにはほぼ目に頼っていると言ってよいですが、見えにくさのある人の場合、視覚以外の感覚を使うことがあります。これはある小学校に上がる前の盲の子どものエピソードですが、ある時、保護者と通学途中の駅に着いたときに、いつもと駅の様子が違うと言い出したことがあったそうです。確かに遠くの方で改修工事をしていたので、いつもと風の通り具合が違ったことで気づいたようでした。工事で駅の一部が足場や覆いがされたことで、風の向きが変わったのでしょうか。また、それに伴って音の響き方や方向がいつもと違って聞こえたことも、変化を感じた要因だったかもしれません。

このエピソードは、見えにくさのある人が、音のみならず晴眼者は気づかないような変化を鋭敏に感じ、環境を把握している一つの例になります。ただし、少し申し添えておきますと、こうした感覚は人それぞれですので、見えにくさがある人は、誰もが同じように身につけているわけではありませんのでご注意ください。